

岸田文雄総理への手紙

拝啓 岸田文雄内閣総理大臣閣下

黙っていられなくなつて、ここに一筆申し上げます。

岸田総理、今日は日本のどの部分を破壊されましたか？ 国民の多くが岸田政権のことを売国政権と揶揄しているのは、当然ご存じですね。しかし、馬耳東風、何も反応しない岸田政権の厚顔ぶりに、私は言葉を失つております。

大東亜戦争終了後から今日までの78年間、歴代総理の実績を振り返れば、失政や左

翼イデオロギーに染まった政策など、数々見られましたが、意図的に国民に敵対し、日本そのものを破壊した総理大臣は、岸田さん、あなた以外にはいませんでした。

岸田さん、いったい何を恐れているのですか？ 関心はご自分の政治生命の維持だけなのですか？ 政界に打って出られた時、命を懸けて国家と国民を守ろうという、崇高な使命感を持って、永田町入りされたのではなかったでしょうか。

声なき国民は、たとえ好き嫌いはあつたとしても、日本の総理たるもの、最後は国民を守ってくれると信じているのです。聖徳太子の17条の憲法にあるように、国民は「詔を受けては、必ず謹む」のです。上からのお達しには、必ずそれに従うというDNAが流れています。

文豪・森鷗外が、短編『最後の一句』で書いているように、「お上のことには、間違いはございますまいから」、国民は総理を信じているのです。これまで破壊に努められたことをすぐに取り戻すのは、時間的に無理があるかもしれません。

しかし、岸田総理、政治家としての人生の終わりを迎えるにあたって、せめて国民に対する最初で最後のご奉公として、国民のために命をささげていただきたい。

それが、これまでの日本破壊という国民への裏切りを、贖かがなうせてもとの誠意ではないでしょうか。私たちは、総理の最後の誠意を信じます。総理のなさることには、間違いがはいはずだからです。

岸田総理、憎越ながら以上を申し述べて、本書のあとがきとしく存じます。2024年以降、日本が生き残れるか否かは、岸田総理、あなたの人間としての決断にかかっているのです。一刻も早い決断を切にお願い申し上げます。私のひとり語りに耳を傾けてくださいます、本当まことにありがとうございます。

岸田政権の日本破壊の数々

ところで、読者の方々の中には、岸田総理の日本破壊政策を信じられないと感じておられる方も、少なくないと思います。そこで、岸田政権の最近の日本破壊の例を、LGBT法と移民問題に絞って検討します。

日本の破壊とは、我が国の伝統的価値観を悉く無視して、グローバリスト連中に日本を売り渡している政策です。問題は、無意識に実践しているのではなく、唯々ただただディープステートの指示通りに動いていることです。そこに、大和心やまとこころのかけらも感じられません。グローバリズムという漢心むんしんに絡めとられた政権の虚ろな姿です。グローバルな交流が当たり前の今日の世界において、我が国のグローバル化を図る政策が必要としても、日本という軸がなければ漂流するだけになってしまいます。軸を喪失した現在の日本は、国難の真最中にあります。以下、国難の正体に迫りたいと思います。

LGBT問題の裏

最近の例として挙げられるのは、LGBT理解増進法の制定です。G7広島サミットへのバイデン大統領の出席を人質に取られ、法案の内容を十分詰めないままあわただしく国会に提出され、野党案と合体して成立させました。

LGBT問題は個人の性嗜好という最もプライベートな分野にかかわる問題であるだけに、そもそも法律をもって個人の嗜好を一定の枠にはめてしまうことは、何と弁

解しようとも、個人の生き方そのものに対する挑発です。差別的なかつた日本に強制的にLGBT被害者を仕立て上げ、正常なマジョリティとの対立を法律によって固定化したのです。自称T（トランスジェンダー）に対して女性の権利を守るための諸施策の必要性が云々されること自体、この法律が無理筋であることを証明しています。結局温泉旅館など現場レベルに降ろされて、混乱を招くことが既に目に見えています。いやしくも個人の自由な生き方が憲法上の権利として保証されている我が国においては、LGBT法は憲法に抵触する恐れのある重大問題なのです。にもかかわらず、日ごろ人権にうるさい左翼政党的の国会議員たちは、今回なぜ沈黙を保っているのでしょうか。LGBT法の懸念の一つは、教育現場における混乱です。少なくとも、小中学生にLGBT教育を施すことは学校側と保護者との間に軋轢を生む可能性が高いでしょう。LGBT教育を巡って、社会の分断が進む危険が予想されます。憲法が保証する正当な教育を受ける国民の権利が侵害されることになるのです。

注目すべき点は、LGBT法は異次元の少子化対策を打ち出している岸田政権の目的と真つ向から矛盾することです。アメリカの過激黒人団体「Black Lives Matter」(ブラック・ライブズ・マター)は綱領でLGBT、とりわけTを重視しており、その理由はアメリカ人にヘテロセクシャル(異性愛)に対する関心を萎えさせることにあると謳っています。つまり、子供を作ることに関心を無くさせることです。巧妙な人口削減策の実施なのです。岸田政権は少子化対策といながら、現実には少子化推進策を実行しようとしているのです。この深刻な矛盾に岸田政権は気づいていないように見受けられます。気づいていないというより、気づく必要がないとみているのかもしれませんが。LGBT法が少子化を促進することになるかもしれないと考えることを、頑なに拒否しているように思えてなりません。さらに言えば、両者の関係を正面から取り上げることは、国民の身になって考えることを意味するので、日本を破壊するためにはそのような迷いがあってはいけないと、自らに言い聞かせておられるのでしょうか。このように、頭から国民を愚弄しても、良心が痛まないとするなら、私たちの想像を絶する強心臓をお持ちなのかもしれません。

国民の側もこの矛盾に鈍感な様子です。言い方を変えれば、国民が岸田政権の破壊工作に気づいていないからこそ、好き勝手に日本の破壊に専念することができるのか

もしません。だとするならば、国民として破壊工作を阻止するための方策は、ただ一つ、岸田さんの魂胆を見破ることです。2024年を平穩の内に迎えるためには、私たちの気づきが決定的に重要なのです。

移民といつ名の日本乗っ取り作戦

LGBT法と並んで日本を破壊している政策は、移民問題です。メディアで盛んに人手不足が報道されていることが大変気になります。例えば、小中学校の教員の不足です。しかしちよつと考えてみれば、最近少子化のため生徒数が減ってきており、小中学校の統廃合が進んでいます。にもかかわらず、なぜ学校で教員不足なのでしょう。生徒数減少に伴い、新規採用者を抑制してきたからというのが表向きの説明ですが、いかにも苦しい言い逃れに聞こえます。外国人の教員を採用しろとの世論作りを狙った姑息な手段とみなさざるを得ません。また、大学進学者の数が減っているのに大学数が増えていることも矛盾しています。

これらの人手不足を補うために、予備軍たちが観光客を装い現在大挙して我が国を訪れています。コロナ禍が一段落したので外国人観光客の受け入れを開始したとの政府の説明は、本質を隠すものです。最近の報道によれば、2023年9月の国別訪日客数トップ5は、韓国(26・1%)、台湾(11・6%)、中国(10・1%)、米国(7・2%)、香港(6・9%)となっています(日本政府観光局)。観光のためには事実上ビザが不要ですから、いわば誰でも訪日が可能です。問題はこれらの訪日客のうち観光が終わっても帰国しない連中がいることです。彼らは、日本で何をしようと考えているのか。多分就職でしょう。これには、岸田政権の後押しがあるからです。

例えば、品川駅の遊歩道には、「共生社会の実現のため、外国人の雇用に協力してほしい」との垂れ幕が掛けられていました。外国人の雇用は労働ビザで入国したもののみ可能です。要するに不法滞在外国人を積極的に雇用するようにとの政府のお達しと解釈することが可能です。つまり、政府自らが、不法滞在を奨励しているのです。岸田政権は賃金の安い不法滞在者に職を奪われている日本人勤労者の境遇を考えたことがあるのでしょうか。もしこのような不法滞在者が前述した教員不足などの埋め合

わせをすることになれば、日本の教育は徐々に外国人不法滞在者の教員に蹂躪じゆうりゅうされて行く恐れが高いでしょう。

国難への対処法

かつて日本は少なくとも3回深刻な国難に見舞われました。第1回目は紀元1、2世紀ごろの儒教伝来です。当時文字を持っていなかった日本人は中国語が日本文化を席卷する恐れを感じて、儒教文献を日本語読みするという離れ業を發揮して、孔孟の教えを日本化しました。次に、6世紀になって仏教が伝来しました。我々の先祖は、ほんちすいじやく本地垂迹説あまてらすおみかみによって、天照大神は大日如来と同じものだと理解して、仏教を日本化して受け入れました。私たちの大宗は日本人が開祖のお寺の檀家に属しています。

このような歴史を回顧して、芥川龍之介は我が国が固有の文化を破壊される国難を「造り変える力」で克服してきたことを例示しながら、1549年のフランシスコ・ザビエルの日本上陸から始まった一神教文明であるユダヤ・キリスト教の「破壊する

力」に対し、日本文明を守るために「造り変える力」を發揮するよう呼びかけました〔「神神の微笑」〕。芥川龍之介が、いわゆるキリシタン物といわれるユダヤ・キリスト教の問題点を鋭く描いた短編集の中で「神神の微笑」を世に問うたのが1922年でした。当時の日本は、自由主義、民主主義、社会主義、それに共産主義など外来思想に翻弄しやうりやうされており、ユダヤ・キリスト教文明の「破壊する力」が猖獗しやうけつを極めていました。危機感を覚えた芥川は「神神の微笑」を書いて、日本人に伝統的知恵に目覚めるよう呼びかけたのです。

この本は、キリスト教の布教が日本古来の靈力の抵抗にあっていることを明らかにした短編です。その中で、安土桃山時代に布教に来ていた実在の神父オルガンティノに日本での布教が困難を極めている苦悩を告白させます。そこへ、古来日本を守護してきた老人の靈が現れ、日本人の伝統的力について説教します。日本人はたとえキリスト教に表向き帰依しても、それはあくまで日本化したキリスト教なのだ。日本人は仏陀の教えにも帰依しているが、インド仏教ではなく日本人が開祖になっている仏教だ。だから、デウスも仏陀のように日本人化する宿命にある。日本を守護している靈

は、何処にでも、また何時でもいるとオルガンテイノに警告して去ってゆきました。芥川は日本人なら「破壊する力」を日本の伝統精神に合うように造り変えて、日本を守ることになるだろうと確信していました。デウスが勝つか、日本の古代霊が勝つか、1922年の段階では決着がついていないが、やがて日本人自身が決着をつけるだろうと後に続く私たちに希望を託しました。芥川龍之介は、同じキリシタン物で、『おぎん』という短編を残しています。

『おぎん』は日本人の「造り変える力」の源泉が先祖崇拜にあることを強調しました。江戸時代、キリシタン禁止令のさなか、キリシタンである養父母に育てられたおぎんは、ある日養父母と共に刑場に連行されました。火あぶりの刑の執行前に、転向の機会を与えられたのです。火あぶりを覚悟し、キリストの下に行くことができるとあくまで転向を拒否した両親に比し、転向すると宣言したのがおぎんでした。おぎんは、その理由を説明して、縛られた角柱から生みの両親が眠る墓場の松の木を見たとき、キリスト教を知らなかった両親は、地獄に落ちているはずだが、自分一人が天国に入ったのでは申し訳が立たない。そして、二人とともに地獄へ行こうと説得して、養父母

も棄教したという話です。この短編は、先祖に対する敬愛の思いが、キリスト教が約束した天国よりも重要だったことを明らかにしています。フランシスコ・ザビエルなど当時の宣教師たちの報告書には、キリスト教に改宗したキリシタンに対し、キリスト教を知らない先祖は、皆地獄で苦しんでいると説明すると、彼らは悲しそうな表情になるとの記録が残されています。

芥川龍之介は、『おぎん』において、私たちの伝統的宗教感情がキリスト教を凌駕していることを強調したかったのです。先祖に繋がる家族愛の強さです。日本社会が安定していたのは、先祖崇拜が大切に守られていたからです。

さて、上に見たLGBT法や移民は先祖崇拜という宗教的感情を無視するものです。つまり、家族の絆を破壊することが目的なのです。なぜなら、家族の紐帯を断絶すれば、独裁支配が可能となるからです。プーチン大統領が事あるごとに家族の重要性を強調しているのは、かつてのロシア革命時のごとき伝統的価値の破壊は国民を不幸にすることを、身にしみて感じているからなのです。

我が国においては、「造り変える力」と「先祖崇拜」が大和心を守ってきたと言えます。

芥川龍之介が1922年に後に続く私たちに託した希望が、岸田政権になって思いもよらなかった方向転換を遂げました。岸田政権は、ユダヤ・キリスト教文明側についてしまったのです。つまり、古代霊が追い払おうとした「破壊する力」の権化ごんげになってしまいました。ここに、日本は日本で無くなったのです。岸田政権が日本人の政権でないことが、この点でも証明されます。岸田政権は日本の伝統的価値観を完全に破壊する政策を臆面もなく実践しています。LGBT法や移民奨励に加えて、2024年には選択的夫婦別姓問題そしやうが祖上そじやうに上るでしょう。

国民は自衛を

このような日本破壊政権に対し、私たち国民に残された手段は政府を当てにせず、自ら自衛する道を選択することです。これは決して孤独な戦いではありません。実は、そのヒントを示して下さったのが、田中英道・東北大学名誉教授による「日猶同化論」にちゆうです。既に紀元前10世紀の縄文時代からユダヤ人たちは日本列島に渡来していました

が、彼らは縄文日本人の生き方に共感して、そのまま日本に同化してゆきました。

その後も数回にわたりユダヤ人たちは渡来し、日本に彼らの痕跡を残しつつ、居つくようになったというわけです。彼らは日本文化の高度化に貢献しました。古墳群や神社などは彼らの残した遺産といえます。また、現在の日本人の9分の1がユダヤ人の血を引いているそうです（田中英道『日本にやって来たユダヤ人の古代史』文芸社）。つまり、現在の日本人のうち約1400万人がユダヤ人系だとすることも可能です。

これは、日本が世界で最大のユダヤ人系の国であることを意味しています。イスラエルは1000万人以下です。アメリカのユダヤ人は500万人前後にすぎません。しかも、彼らの大宗はディアスポラ・ユダヤ人で、国家を認めないグローバリストの人々です。しかし、これからは前述したハマス・イスラエル戦争に見られるように、戦争指向のグローバリズムが廃れ、国民を大切にするナショナリズムが世界の潮流となるでしょう。世界最大のユダヤ人系国家日本と2位のイスラエルという二大ナショナリズム国家が連携すれば、世界に大きなインパクトを与えることになるでしょう。トランプ大統領の「アメリカ・ファースト、各国ファースト」に基づく世界の調和、

ブーチン大統領が依って立つ「ソボルノスティ集団政体」とともに、世界に平和が訪れることになるはずだ。とかく、特別視されがちなユダヤ人に対し、彼らが持つ普遍性の側面に世界の関心が向けられることが、予想されます。

芥川龍之介は、日本人の多くがユダヤ人との混血であることには気づいていませんでした。だから「造り変える力」がユダヤ・キリスト文明の「破壊する力」にいずれ勝利すると確信していたのです。しかし、田中説によれば、日本列島が持つ強力な同化力がユダヤ人を日本人に造り変えてしまっていたのです。1922年の当時において、日本は既にユダヤ・キリスト教文明に勝利していたと言えるのです。

これを究極の歴史修正主義です。今後は、この歴史的事実を世界に発信することが求められます。発信が世界に受け入れられるためには、私たち自身が、日本の伝統的統治形態である「君民共治」を実現し、世界の師表となる必要があります。

君民共治とは、天皇陛下の權威を一方に戴き、他方に民による権力行使を可能にする政体です。權威と権力の二権分立ではありませんが、単なる分立ではなく、民もまた天皇陛下と同様の權威を備えた存在であることが重要な点です。この点を、国語学者

の山田孝雄氏は、文部省編『ちよこく肇国の精神』の中で、日本の祭祀共同体精神は、私たちが我が国を神国とする自覚に基づくとして、以下の通り論じておられます。

「この神国観は、この国が神から生まれたということをも基として起る思想であるが、神を祖として生まれたその子は当然神と本質を同じくするものであらねばならぬ。即ちこの国においては国土・国民・君主三者みな神の処生であり、その神の正系を伝えたまうが天皇であらせられると確信している。ここに天皇の現人神であらせられることは勿論であるが、国土も神格を有し、国民も神格を有すると考える」

つまり、君民共治とは、祭祀共同体の精神に基づく統治体制のことなのです。したがって、たとえ権力の行使に従事していても、神と本質を共にする権力行為なのです。やっと私たちは、2024年以降何を目指すべきか、その課題にたどり着きました。私たち一人ひとりが、神の子孫としてこれから生きてゆくことです。これが、かみなが惟神の道なのです。日本人に生まれたことを感謝して、各々が神の子としての使命を発揮してゆきましよう。そうすれば、2024年以降、我が国に黄金の時代が訪れることになるでしょう。